

a 学校教育目標		b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 地域・保護者の信頼を得て、前進する「チーム三原小」の学校。 「三原小で学んでよかった」といえる学校										
評価計画				自己評価						改善方針		学校関係者評価		
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策等	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント
					h 達成値	h 達成値					適正	不明	不適正	
確かな学力の育成	基礎・基本の定着	授業改善・授業力向上(授業モデルの活用、ノート指導、学習ルールの徹底、ICT、相互参観)	単元テスト平均70%以上の児童の割合 ①国語科 思考判断表現 ②算数科 知識・技能 ③算数科 思考判断表現	いずれも80%以上	①93.4% ②91% ③81.4%		①116% ②113% ③101%	A	単元テスト平均値は、いずれの観点も達成することができた。しかし、学年が上がるにつれて達成値が下がっており、算数科思考判断表現においては、中学年73.6%高学年78.9%と目標値の80%を下回っている。NRTの標準偏差は、いずれの観点も達成することができた。しかし、5段階分布の学年結果を見ると、2年・5年・6年において80%を下回っている。	算数科の授業においては、考え方の説明をペアで確かめさせたり、適用題によって内容の定着を図ったりすることを重視する。また、学習進度に合わせた家庭学習を課したり、プレテストによってつまずきを把握したりして、一人一人の学力向上を目指す。桜山タイム(学力朝会)や家庭学習でNRT対策プリントに繰り返し取り組ませる。	○			・どの学級も落ち着いて授業を受けていた。授業中の先生の何気ない、さりげない声掛けができていた学年があった。引き続き、自分の意見をのびやかに言える環境を作り、学習意欲を高めることができるように努めてほしい。
		学力向上に向けた取り組みの充実(学力向上強化週間、桜山タイム・学力朝会)	NRTの標準偏差 ①教科総合50以上(各学年) ②5段階分布で3段階以上の児童の割合(全校)	①100% ②80%以上	①100% ②81%		①100% ②101%	A			○			
	学習意欲の向上(学びに向かう力の育成)	プロジェクト型学習の考えを基にした単元開発(カリキュラムマニフェスト、課題発見・解決学習) 家庭学習強化週間の実施	アンケートにおける児童の肯定的回答 ①「勉強でできなかったことができたとうれしい」4月、10月、12月 ②「自分で決めて行動する(主体性)が伸びていると思う」6月、10月以降の毎月 ③「三原の町にはよいところがある」10月、12月、2月	①75% ②75% ③75%	①88.9% ②82.6% ③94.0%		①118% ②110% ③125%	A	いずれも肯定的回答が80%を上回っており、学習意欲が高く、郷土への愛着も強い児童が多いことが分かる。その一方で、①において「全くそう思わない」児童が11名(2.8%)、③において「全くそう思わない」児童が6名(1.6%)いる。手応えのある学習を繰り返すことやPBL型学習を通して郷土に対する理解を深め、強く価値付ける必要がある児童がいる。	「広い発問・つなぎ発言・自力解決」という授業の重点を全員で共有し、授業改善を図るため、相互参観や板書交流、ノート交流・展覧会を継続・実施する。生活科や総合的な学習の時間におけるPBL型学習の各学年のプロジェクトが次第に実現に向かっていく。郷土三原に対する理解や思い、気付きを振り返り、自己の成長を価値付けたりする。	○			
豊かな心の育成	生活指導項目の徹底と体験活動の充実による豊かな心の育成	生活指導重点目標 5項目の徹底	児童による振り返りであいさつの項目が4点以上になる児童の割合	90%	72.0%		80.0%	B	「あいさつができて」と肯定的に回答した児童は72.0%であり、目標を達成していない。自信をもって自分からあいさつをしていると回答できた児童は少ないことが分かる。教師の見取りとしても、「あいさつが返ってこない」という実態があり、コロナ禍とはいえ、あいさつが十分にできているとはいえない状況にある。	「あいさつを返す」という基本に立ち寄り、自分と直接関わることが少ない人物も、あいさつを返すことができるように指導をしていく。その際、あいさつをすることの良さを実感させたり、礼儀・マナーとして必要なことであることを確認したりしてしていく。	○			・授業中の聞くという態度が、日常生活の友達との関わりにもつながっていくことを考えると、あらためてその大切さを感じた。 ・生徒指導5項目のうち「挨拶運動」について重点的に取り組んでいることが良い。 ・子どもたちの内面に寄り添い、取り残される子どもが一人もいないようにしてほしい。
		自己肯定感の向上	友達の関わりの強化 認め合う集団づくり	QUアンケートにおける肯定的回答 ①「クラスの中に気持ちをわかってくれる人がいる」 ②「友達が何かをうまくした時、ほめてくれる」	90%	①81.8% ②87.5%		①90.9% ②97.2%	B	「クラスのなかで気持ちよくわかってくれる人がいる」と肯定的に回答した児童は81.8%であり、目標を達成していない。全体の約19%の児童が、学校の中で困難に感じたり、窮屈な思いをしていたりしていると思われる。また、「友達が何かをうまくした時、ほめてくれる」と肯定的に回答した児童は87.5%であり、目標を達成していない。①の項目と比較すると、褒めている児童に対し、気持ちを分かってくれているという実感が薄いことから、友達の関わり方について十分であることを考えられる。	児童の「聴く」態度を重点的に育てることを通じて、友達と学習場面でも生活場面でも、会話ができるようになっていく。そのために、児童に自己開示をさせるワークシート等を活用し、自分のよさや友達のよさを積極的に交流させていくようにする。また、よさを認め合う活動を継続的に行っていくようにする。	○		
	学習集団、生活集団としての学級風土づくり	教職員のアンケートの評価(年間3回、学期末実施)	90%	94.7%		105.0%	A	「周りの人に温かい声かけができる指導をしている」と回答した教師は94.7%であり、目標を達成している。学年担任同士で、児童への関わり方について話し合う時間を積極的にとることができていることが、統一した指導に生かされている。教師と児童の関わりは十分に指導できていると考えられるが、児童をつなぐ指導は、上記の結果から不十分であると考える。	学習指導や生活指導の中で、児童が温かい声かけができるように指導はできているが、それが児童に浸透していない実態があるため、実感を伴う指導が必要である。自他のよさを見つける言葉や、温かい声かけの言葉などの提示で「見える化」したり、ロールプレイング型の指導でソーシャルスキルトレーニングを行ったりすることで、具体的に考えさせていくようにする。	○				
健やかな体	健康教育と教育活動の工夫による運動能力・体力の育成	体力の向上	週3回以上外遊びをして遊ぶ児童	大体朝や昼休みに外遊びを週3回以上80%以上。	100%				感染症予防のため、目標達成のための方策に取り組むことができなかった。学年を限定して外遊びを行うようにしているが、週に1回程度しか外遊びの機会を与えることができないのが現状である。	新型コロナウイルス感染状況を鑑みて、児童の安全を確保できるように外遊びの機会を与えていく。10月以降は熱中症の心配はないので、マスクを着けたまま外遊びをさせる。	○			・コロナ禍のため、思うように体を動かす機会が減少している。休憩時間や体育の時間にしっかりと走ったりスポーツをしたりするきっかけづくりを行ってほしい。 ・メダルの朝ごはんは学びの基盤づくりにつながるので、継続して取り組んでほしい。
		家庭での生活習慣の定着	年2回の生活習慣実態調査の実施、保護者啓発活動の実施	健康週間の調査で、全体の平均が4点以上である児童を90%以上にする。	90%	57.3%		63.7%	C	昨年度第1回と比較すると、すべての項目が上昇している。今年度から累計時間に変更したテレビ・タブレット等視聴時間についても、一日当たり1~2時間程度と良好である。平均値が4を下回っている項目は以下の3つである。 【金メダルの数】児童の意識というより、保護者の努力の部分が大きい。例年低い。 【就寝時刻】昨年度からの課題である。Chromebookの持ち帰りがスタートしたので、改めて画面を見る時間や就寝前の使用について指導が必要である。 【仕上げ磨き】低学年は仕上げ磨きをするように設定しているが、自分で丁寧にしている児童もいるため、「ていねいに歯磨きをすることができたか」のような項目に変更する必要がある。	【金メダルの数】児童の意識というより、保護者の努力の部分が大きい。例年低い。給食指導で完食や食材への感謝を意識させる。 【就寝時刻】昨年度からの課題である。Chromebookの持ち帰りがスタートしたので、改めて画面を見る時間や就寝前の使用について指導が必要である。 【仕上げ磨き】低学年は仕上げ磨きをするように設定しているが、自分で丁寧にしている児童もいるため、「ていねいに歯磨きをすることができたか」のような項目に変更する必要がある。	○		
信頼される学校	保護者・地域から信頼される学校づくり	地域を繋ぐ教育活動の工夫	地域の行事への参加 ゲストティーチャーの奨励 幼・保・小・中の連携	各学年、年に1回以上	100%	50%		50%	D	現時点では、以下の活動を行っている。 1年生・・・幼稚園と交流 5年生・・・漁協と農林水産課と連携(水産教室) 6年生・・・広報戦略課と連携(出前講座) コロナ禍に伴って、計画した活動ができなかった学年もあったが、オンラインでつながりをもつことができた。	今後の計画では、以下の活動を予定している。 2年生・・・町探検で地域の方と交流 3年生・・・だるま行列参加に向けて地域の方への聞き取り学習 4年生・・・やっさで三原を元気にするプロジェクトでやっさ振興協議会の方を講師奨励 状況が刻々と変わるので、早めに計画が実現できるかを検討しながら、その時できることを工夫した活動を設定していく。	○		
		定期的な情報公開	学年便りの作成 HPの更新	月に1回以上	100%	100%		100%	A	どの学年も、学校での児童の様子や学年で行った行事等を紹介することができた。コロナ禍のため、学校へ来校する機会が少ない保護者のために、今後も計画的にお便り発行やHP更新を行っていく。特に、体育参観日の動画を公開することができ、保護者の皆様に喜んでいただいていた。	コロナ禍のため、学校へ来校する機会が少ない保護者のために、今後も計画的にお便り発行やHP更新を行っていく。	○		
		働き方改革(次世代の働き方への体制づくり)	計画的な時間外勤務の短縮 業務改善の推進	時間外勤務月45h以下を6か月以上実施	100%	83.3%		83.3%	B	時間外勤務月45h以下を6か月達成できた職員の割合は39.2%であった。学年始めの4月、研究授業があった6月についてはオーバーしている職員が半数だった。月別平均では4月以外は時間外勤務月45h以下であった。45時間以下を意識している職員は57.7%であった。	勤務時間内で業務が集中する時期の短縮時程も視野に入れた時程変更について考えていく。校務分掌見直し会議により、仕事量の平準化を図っていく。	○		・各学年が地域とつながりをもった学びを展開していることが良いと感じた。 ・働き方改革を推進していくことの難しさとその必要性を感じた。
		水曜日の定時退校日と月1回18:00退校の実施	100%	42.3%		42.3%	D	完全実施できた職員は42.3%と徹底できていない。要因として、勤務時間内に収まらない業務量、緊急の生徒指導対応等が考えられる。	定時退校日の表示、定時退校30分前のコール、職員同士の声掛けを行い、確実に定時退校を実施する。水曜日は緊急以外は放課後の会議を入れず、学級事務の時間を確保する。	○				
		教職員のアンケートの評価(年間2回実施)	90%	76.9%		85.4%	B	元来と聞き合ふ時間が確保されている09.2%、業務改善が図られていると感じる84.6%であった。時程変更により朝の時間、授業と授業の間の時間にゆとりが生まれたこと、下校時刻が繰り上がったことにより、児童に向き合える時間が確保できた。	勤務時間内に学級事務等ができる時間を確保していく。会議の終了時刻を明記し、時間内で運営できるようにする。	○				

【j:自己評価 評価】
A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】
イ:自己評価は適正である。 ハ:わからない。
ロ:自己評価は適正でない。